

四中だより

No. 9

令和2年（2020年）8月6日
枚方市立第四中学校
校長 鶴島 茂樹

＜生徒会、自分たちの意志で動き出す！！＞

先日、生徒会長さん、副会長さんが校長室に訪ねてきました。「募金活動を許可してください」ということでした。話を聞いてみると、募金先は「国境なき医師団 新型コロナウイルス感染症危機対応募金」で、自分たちの目的として、「社会のために今、自分たちができることを考え、実行する機会を作るため」ということでした。話しぶりから自分たちでしっかりと考えたということがわかったので、許可しました。例年は、ユニセフ募金をしていたそうですが、生徒会の先生にきくと、今回は自分たちで調べて募金することを決めたそうです。

（参考）

「国境なき医師団」は1971年にフランスの医師とジャーナリストのグループによって作られた、独立・中立・公平な立場で医療・人道援助活動を行う民間・非営利の国際団体です。1992年には日本事務局も発足し、1999年にはノーベル平和賞を受賞しています。

その活動範囲・内容は、世界の紛争地域や難民キャンプ、移民やホームレスなど、弱い立場に置かれた人々が暮らす国や地域での、医療行為や感染症対策、手洗い場等の設置による衛生環境づくり、教育などの実施です。現在、最大の課題である新型コロナウイルス感染症を食い止めるために、流行以前から医療体制が弱い、衛生設備が整っていない難民キャンプや紛争地等、世界各地で全力を尽くしています。

生徒会による募金活動は、先週7月27日（月）～7月31日（金）の登校時に実施されて、結果、40,254円もの募金が集まりました。すばらしいなと思いました。金額の多少ではなく、先生たちが強く呼び掛けたわけでもないのに、生徒会本部の提案ひとつで、たくさんの四中生が協力してくれたことに値打ちがあります。

生徒会では、これ以外に自分たちとしての感染症対策として、ポスターも制作してくれました。まさに、自分たち自身のために自分たち自身が新型コロナ感染症対策に立ち上がったと言えるでしょう。

先生たちもたくさんの元気をもらいました。共に、このしんどい状況を乗り越えていきましょう！！

★保護者の皆様、募金活動へのご理解、ご協力、ありがとうございました。

生活委員もがんばっています。毎朝、門に立って、あいさつ運動をしています。あいさつはコミュニケーションの基本・・・元気にあいさつしましょう！！

75年前の今日、原爆が・・・

今日、8月6日は広島原爆の日です。8月9日には長崎にも原爆が投下されました。以下は被爆者の方の証言です。

明日への伝言（朝日新聞7・29付け朝刊）より

＜悩んだ末、沈黙を破った＞

被爆をひた隠しにした時期が30年以上ありました。広島で被爆した私は、転校先の岡山県で「原爆さん」と呼ばれて仲間外れにされたのです。「ピカのことはもう誰にもいっちゃいけん」。泣いて帰った私に母が言い聞かせた言葉をずっと守っていました。

転機は1982年。末期がんで入院した義姉を幼い次男を連れて見舞った時、「黙ってちやいかん。子どもがかわいいなら」と叱責されました。ともに被爆者だった母と義姉が残した「二つの遺言」。悩んだ末に選んだのは沈黙を破ることでした。

今では年に10回程度被爆者証言をしています。被爆者が直接語れる相手はごくわずか。・・・中略・・・それでも語るのはなぜかと問われれば、私はあの日何が起きたかをはっきり覚えている最後の世代だと思うからです。今年の8月6日も被爆証言をする予定です。

＜おなかの私 光失った母＞

あの日、母は爆心地から約2キロ離れた広島駅の近くにいました。「B29 だ」。前にいた兵隊がそう言った瞬間にピカッと光り、意識を失ったそうです。両目や体のあちこちにガラス片が突き刺さり、目が見えなくなりました。手術をすれば少し視力が回復する可能性もありました。でもおなかの中には私がいまいました。悪影響を考え、母は手術を受けませんでした。自分の目と引き換えに、私の命を選んだのです。母は全盲でも強く生きました・・・中略・・・私たち5人の兄弟を育て上げ、弱音を一切吐かない気丈な人でした。

「きれいよ」。51年前、私の結婚式で、母はそう言いました。着物姿の私のことは見えなはずなのに、振り返る度涙が出そうになります。

2013年、母は94歳で亡くなりました。被爆者が亡くなっていく一方、母の光を奪った核兵器と戦争は、いまだ世界に存在しています。私は母のおなかのなかで放射線を浴びた胎内被爆者です。14年に発足した胎内被爆者の全国連絡会に加わり、証言活動を続けてきました。「母の生きた証を残すことで、争いがなくなれば」という気持ちで語っています。母の死後、思いは強くなっています。私の命がある限り、伝え続けたいです。

* 沖縄で多くの民間人が犠牲になり、広島・長崎に原爆が投下されるまで戦争をやめなかった日本・・・私たちは、二度と同じような悲劇が起こらないよう、事実を学び、考え、そして伝えていく必要があると思います。